

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 10 月 26 日現在

機関番号：23302  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19K10825  
研究課題名（和文）看護学生のコミュニケーション教育に及ぼす体験活動とフォーカシングの有効性の検証

研究課題名（英文）Examining the Effectiveness of Experiential Activities and Focusing on Communication Education for Nursing Students

研究代表者  
武山 雅志（TAKEYAMA, Masashi）  
石川県立看護大学・看護学部・名誉教授

研究者番号：50381695  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の準備として防災キャンプ・プログラムの動画とフォーカシング技法のマニュアルを作成した。COVID-19感染拡大の影響を受けて研究協力者が集まらず、研究期間を延長した。しかし参加群は4名だけにとどまった。非日常体験として宿泊体験を予定していたが、感染リスクを考慮して、デイキャンプ方式の防災キャンプに変更した。参加群の人数が少ないため、非参加群との間でコミュニケーション・スキルについて統計的な検定はできなかった。しかし学生個々のコミュニケーション・スキルの変化を検討したところ、表出系スキルの変化だけではなくさまざまな形があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
本研究はCOVID-19感染拡大の影響を受け、研究協力者を十分に集められず、非日常体験を十分に実施できず、実証的な研究成果を上げるには至らなかった。しかし学生個々のコミュニケーション・スキルの変化にはさまざまであることが明らかとなった。臨床現場における事例がより複雑化している現状を考慮し、自己表現を中心とした豊かなコミュニケーション・スキルを身につけ、信頼関係を構築できることが期待されている。それを可能にするために、非日常体験を通じた自己肯定感の改善と自己感覚への気づき、そしてそれを言語化するフォーカシング技法は欠かせないものと考えられる。このような研究アプローチは今までにはなかったものである。

研究成果の概要（英文）：As a preparation for this study, we created a video of the Disaster Prevention Camp Program and a Manual of Focusing Techniques. Due to the spread of COVID-19 infection, the number of research collaborators was not gathered, and the research period was extended. However, only 4 people participated in the group. We had planned to stay overnight as an extraordinary experience, but in consideration of the risk of infection, we changed it to a day camp-style disaster prevention camp. Due to the small number of participants, we were unable to statistically test communication skills with non-participants. However, when we examined the changes in the communication skills of individual students, it became clear that there were various forms in addition to changes in expressive skills.

研究分野：看護教育

キーワード：防災キャンプ フォーカシング 看護学生 コミュニケーション

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

挑戦的萌芽研究として 2014 年度から 2016 年度の 3 年間にわたり「看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴と変化」を実施してきた。その結果、看護学生の 3 年間のコミュニケーション・スキルの変化を見たところ、表現力や自己主張といった表出系のコミュニケーション・スキルをどのように育てていくのかというのが大きな問題であることが明らかとなった。そこで本研究においては表出系のコミュニケーション・スキルを育てるための土台として体験活動を手段として考えた。体験活動は平成 28 年度文部科学白書において「未来の社会を担う全ての青少年に、人間的な成長に不可欠な体験の機会を教育活動の一環として意図的・計画的に創出することは非常に重要です」「体験活動は、直接自然や人・社会等と関わる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組を広く内包しています。」とその充実を期待している。

体験活動を看護学生に用いて「こころゆさぶる体験」となるように防災キャンプという被災状況を想定した非日常場面に身をおき、そこで感じたものに焦点を当ててラベリングするというフォーカシング技法を用いることで自らの感情の覚醒を促すことができるのではないかと考えている。

2. 研究の目的

本研究は、看護学生のコミュニケーションの表出系スキル(表現力および自己主張)を高めるために体験活動とフォーカシング技法を用いて、その有効性を検証することを目的としている。

3. 研究の方法

先ず研究準備として防災キャンプの段階的なプログラムを作成した。これらのプログラムは COVID-19 感染拡大の影響下でも参集しないで事前学習を自宅でできるように、動画を作成する形に変更した。ついでフォーカシングのマニュアルを作成した。

以上の準備を踏まえて大学倫理委員会に倫理申請書を提出し承認を得た(看大第 727 号)。

2020 年度から 2022 年度にかけて研究協力者を募集したが、COVID-19 の感染拡大の影響により研究協力者は思うようには集まらなかった。2022 年度には防災キャンプ・プログラム参加学生(参加群 4 名)に防災キャンプ・プログラムを 4 回実施したが、非日常体験として宿泊体験は実施できずデイキャンプを行った。参加群 4 名と非参加群 53 名にコミュニケーション・スキル尺度(ENDCOREs 尺度)を 2022 年 6 月と 2023 年 2 月に実施した。

4. 研究成果

COVID-19 感染拡大の影響を受け、研究協力者を募集しても十分に集まらない状況となった。そのため参加群と非参加群(1 年生・2 年生)を統制的に比較検討することはできなかった。ただ看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を把握するために、非参加群 53 名の ENDCOREs 尺度の平均と標準偏差を全体と 1 年生 37 名、2 年生 16 名に分けて示した(表 1 ~ 表 3)。

	自己統制		表現力		解読力		自己主張		他者受容		関係調整	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1 回目	18.17	3.15	16.53	3.7	20.45	3.59	14.92	4.4	21.6	3.17	18.26	3.84
2 回目	18.28	3.85	16.58	3.95	20.64	3.53	15.49	4.89	22.38	3.4	19.3	4.02

	自己統制		表現力		解読力		自己主張		他者受容		関係調整	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1 回目	18.24	3.03	16.51	4.13	21.03	3.62	15.43	4.49	21.89	3.12	18.38	4.2
2 回目	18.3	3.32	16.68	4.24	20.81	3.7	16	4.85	22.38	3.23	18.89	3.66

	自己統制		表現力		解読力		自己主張		他者受容		関係調整	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1 回目	18	3.52	16.56	2.53	19.13	3.24	13.75	4.07	20.94	3.3	18	2.94
2 回目	18.25	4.99	16.38	3.32	20.25	3.19	14.31	4.94	22.38	3.88	20.25	4.74

表2および表3を見て分かるとおり、学年が違ってても表現力と自己主張という表出系スキルが他の下位スキルと比較すると平均において低いのは過去の研究結果と一致していた。そしてどの下位スキルにおいても1回目と2回目の変化はわずかであった。

このようなコミュニケーション・スキルの変化の分布を示したのが表4である。1回目と2回目でプラス3以上の変化があった下位スキルの数が3以上あった人数を「プラス変化大」、マイナス3以上の変化があった下位スキルの数が3以上あった人数を「マイナス変化大」、どちらにも該当しなかった人数を「変化小」と分類した。

表4から分かるとおり、非参加群（1年生）では「プラス変化大」「マイナス変化大」それぞれが20%弱見られた。しかし非参加群（2年生）では「プラス変化大」が40%弱、参加群の4名では50%という結果であった。

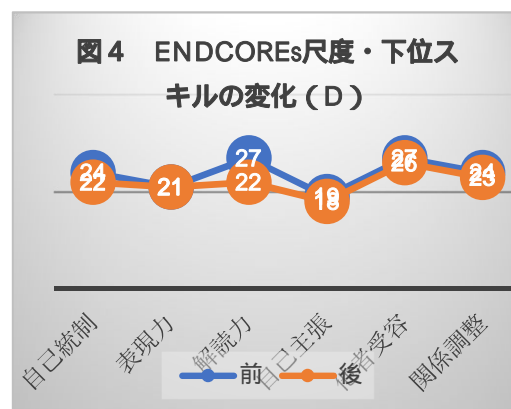
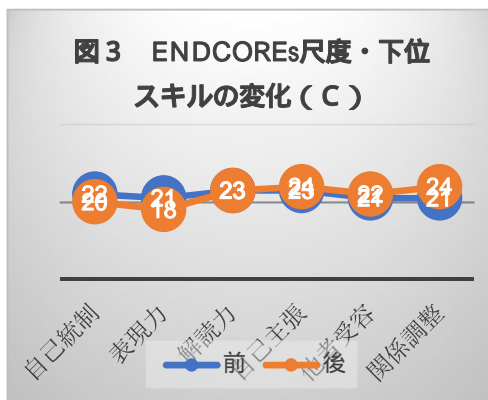
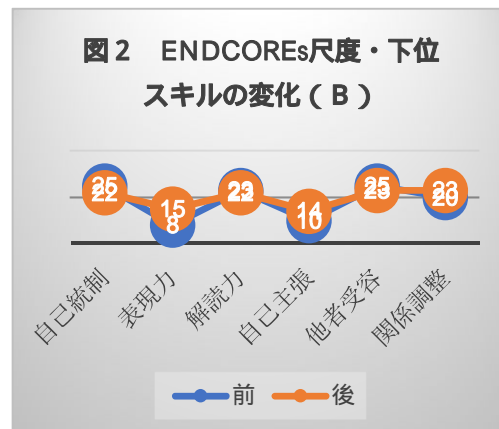
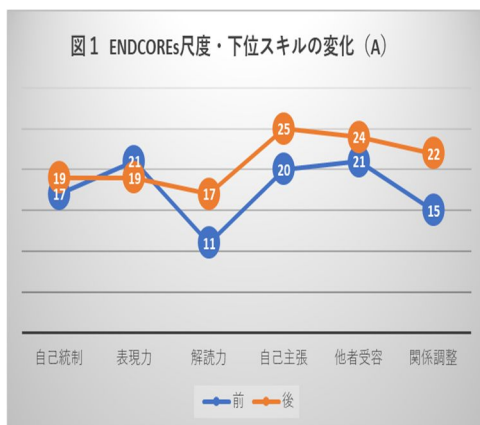
	非参加群（1年生）	非参加群（2年生）	参加群
	37	16	4
プラス変化大	7(18.9)	6(37.5)	2(50)
マイナス変化大	6(16.2)	1(6.3)	0(0)
変化小	24(64.9)	9(56.3)	2(50)

セル内の数値：人数（%）

ついで防災キャンプ・プログラムを4回にわたり実施した2022年度の参加者4名について、そのENDCOREs尺度の変化を見ていくことにする（図1～図4）。

Aさんは4名の中でも最もコミュニケーション・スキルの大きな変化を示した。本プログラムにも積極的に参加し関わっていた。図1から分かるとおり、自己表出系のスキルは元来豊かで、その反面、反応系スキルである解読力や管理系スキルの関係調整を苦手としていた。その苦手とする2つのスキルについては大きな変化が見てとれる。

BさんはAさんとは対照的に表出系スキルである表現力や自己主張を苦手としており、4名の中でも一歩引いた立場で関わっていた。図2からは苦手とする表出系スキルについて平均程度までに改善していることが分かる。



Cさんは図3から分かるとおり、AさんやBさんとは違ってわずかな変化を示したただであった。Cさん自身は元々どのスキルも人並み以上に豊かで自己表現できるものの相手の話を十

分聴くことができているのか心配する気持ちがあることをインタビューでは述べていた。管理系スキルである関係調整が幾分増えているのはCさんなりの手ごたえを感じていることを示しているのだろう。

Dさんは他の3名とは異なり日程がうまく合わず参加回数も1回のみであった。ENDCOREs 尺度のほとんどの尺度で変化はみられず、解読力が幾分減っているという結果であった。しかしどの下位スキルも平均以上であった。

以上のように参加群4名のコミュニケーション・スキルの変化は、必ずしも表出系スキルの変化だけに現れたわけではなく、表出系スキルに変化が認められたのはBさんだけであった。

本研究の結果、看護学生のコミュニケーション・スキルは表現力や自己主張という表出系スキルは、従来の研究結果と同様、反応系スキルや管理系スキルと比べてやや低いことが確認できた。学生全体から見た場合、7か月半の間隔を経たコミュニケーション・スキルの変化はわずかであった。しかし下位スキルの変化を学生個々で見えていくと、多くの下位スキルで変化を認めることができる学生が20～50%あった。学生全体で見えていくとそれが相殺されていることが分かった。また下位スキルの変化は学生個々によってさまざまで、必ずしも表出系スキルだけが変化しているわけではなかった。

これらの結果から学生それぞれが日々の出来事から影響を受け、それがコミュニケーション・スキルにも反映しているのではないかと考えられる。その出来事のどのような要素がコミュニケーション・スキルの変化と関係しているのかを調査的面接で明らかにしていくことができるのではないかと考える。

本研究はCOVID-19感染拡大の影響を受け、研究協力者を十分に集められず、非日常体験を十分に実施できず、実証的な研究成果を上げるには至らなかった。しかし学生個々のコミュニケーション・スキルの変化はにさまざまであることが明らかとなった。

臨床現場における事例がより複雑化している現状を考慮し、自己表現を中心とした豊かなコミュニケーション・スキルを身につけ、信頼関係を構築できることが期待されている。それを可能にするために、非日常体験を通じた自己肯定感の改善と自己感覚への気づき、そしてそれを言語化するフォーカシング技法は欠かせないものとする。このような研究アプローチは今までにはなかったものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 武山雅志、曽根志穂、金谷雅代
2. 発表標題 学生災害ボランティア・サークルに求められる支援力と防災力を高める工夫
3. 学会等名 日本災害看護学会第21回年次大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	曽根 志穂  (SONE Shiho)  (30381700)	金城大学・看護学部・講師   (33306)	
研究分担者	金谷 雅代(東雅代)  (KANAYA Masayo)  (80457887)	石川県立看護大学・看護学部・准教授   (23302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------